

平成23年度共同研究の概要（成果報告書抜粋）

研究種目：一般研究

研究代表者：岩崎 えり奈（共立女子大学 文芸学部・講師）

研究分担者：加藤博（一橋大学大学院経済学研究科・教授）、松岡延浩（千葉大学大学院園芸学研究科・准教授）、藤巻晴行（鳥取大学乾燥地研究センター・准教授）

研究題目（和文）：

チュニジア南部オアシス地方の水の取引慣行

研究概要（和文）：

マグレブ（北アフリカ）地域は、国の大部分が「地中海」に属し、経済発展の方向も、地中海地域という枠組みのなかで考えられることが多い。しかし、マグレブの地理的空間の半分以上は、砂漠とそこに点在するオアシスからなるオアシス地域である。

本研究で調査対象地として取り上げる南部地方は、チュニジア南部のサハラ砂漠の周縁に位置する。そこは、ナツメヤシに基礎をおく農業地帯であり、チュニジアのナツメヤシの数の大半が集中している。本年度の研究は、このチュニジア南部オアシス地方の伝統的な灌漑システム、とりわけ水の取引慣行を明らかにすることを目的とし、灌漑に関する統計情報の収集を行った。これらのデータ・情報収集にあたっては、現地チュニジア人研究者や農業省県支部の協力を得た。その結果、タタウィーン県に関して水利組合についての情報（組合数、面積、農民数、水量など）を収集することができた。

この水利組合とは、末端レベルにおいて、その役割を担うのが井戸を単位に農民間で組織される水利組合（GIC）である。水利組合は古くからある共同体的な組織であり、灌漑一次・二次水路の運営・管理を担当する農業省の「水資源局」と連携して、灌漑施設を含む灌漑三次水路以下の運営・管理を農民から組合が徴収する水使用料で行っている。今日、限られた水資源を利害の異なる村、灌漑地区、農民間で公正かつ効率的に分配することが大きな課題になっているが、そのために現在の水利組合が重要な役割を果たしている。